

○議長（前原英石君） 4番 田村 馨君。

○4番（田村 馨君） 4番田村馨です。

今回、私からの質問の前に、まずは先月の5月5日、石川県能登地方でマグニチュード6.5の地震が発生し、珠洲市で最大震度6強を観測しました。この地震で1人が亡くなられ、32人がけがをされています。このたびの災害で亡くなられた方に心から哀悼の意を表するとともに、被災された方々にお見舞いを申し上げます。そして、被災地の復興が速やかに進むことを願います。

それでは、通告どおり、質問に入ります。

まずは高齢者のフレイル予防について、続いて高齢者の移動支援についての質問を行います。

まず、フレイルとは、加齢とともに心身が衰えた状態になることを意味し、健康な状態から要介護状態へと移行する段階だと考えられ、早期発見し、本人と家族が状態の改善に向けて取り組めば、十分に回復が見込めるとされています。

また、最近では、コロナの影響で高齢者の運動や社会参加の機会が減っている状況であり、NHKの調査でも、外出が減った、あるいは物忘れが増えたなど、気になる結果が出ています。

そこで、本村のフレイル予防の取組についてお尋ねします。

まず、1つ目は、本村の高齢者のフレイルの状況を把握するため、運動機能や栄養状態について調査を行ったことはありますか。また、コロナ禍による高齢者の状況に生じた変化を把握されているのか伺います。

2つ目、国は2020年4月からフレイル健診として、75歳以上を対象とした後期高齢者医療制度による健康診査で、15項目の質問から成るフレイル健診を開始していますが、本村では健診の結果から、フレイル予防にどのように取り組んでいくのか伺います。

続いて、高齢者の移動支援について質問していきます。

近年、高齢ドライバーによる交通死亡事故が社会問題化し、運転免許証の返納数が増えています。運転免許証を返納し、自動車を運転できなくなった後の移動手段の確保が大きな課題となっています。

舟橋村内では特に、通院のための移動手段について、公共交通の利便性が低いという声を多く聞きます。自分の子どもや家族に目的地まで乗せてもらっているなどの証言が

多く聞かれますが、高齢者の運転免許証の返納後の移動支援については、ここはやはり家族に頼るなどの自助に委ねるのではなく、行政の責任で移動手段を確保する必要があるのではないのでしょうか。

そこで、本村における高齢者の移動支援の取組についてお尋ねします。

1つ目は、さきの3月定例会で私がしました地域医療についての質問で、渡辺村長は、近隣医療機関への移動手段の確保が重要とし、医院誘致よりも近隣の病院などにスムーズに受診できる環境を整えたい、そう答弁されましたが、具体的にどのような環境の構築を考えておられるのか、まずは伺います。

そして、2つ目、自動運転バスを導入しての公共交通が村内に実現したとしても、現状、村内に通院できる病院がなく、総合病院や比較的規模の大きな開業医がある近隣自治体へ越境できなければ、移動支援で一番要望の多い病院への通院のニーズには応えられません。この問題について、どのような解決策を考えておられるのか伺います。

○議長（前原英石君） 生活環境課長 田中 勝君。

○生活環境課長（田中 勝君） 4番田村議員のフレイル予防についてのご質問にお答えいたします。

フレイル状況を把握するための調査については、年1回、7月以降に要介護者及び要支援者を除く65歳以上の方に「おたっしゃチェックリスト」を郵送しております。これは、28項目から成る質問票で選ぶ回答によって点数化し、身体的、口腔的、社会的など、様々なフレイルのリスクについて確認するものであります。

返信のあった方を点数化し、点数が高い人に対しては、地域包括支援センターである社会福祉協議会から職員が家庭訪問し、詳細な状況を確認し、その方に合った教室などを案内しております。

コロナ前から行っていた事業であり、毎年60%以上の回収率であります。昨年の令和4年度は482名に配布し、67.2%の回収率でありました。該当項目によって、運動面、栄養面、心理面など、必要なアプローチを行いました。コロナ禍の緊急事態宣言時においては、65歳以上の独り暮らしの方や75歳以上のみの世帯等の見守り対象者に対して電話をかけて健康状態の確認を行った「お元気コール」を社会福祉協議会に委託し、対応しておりました。

フレイル健診については、おたっしゃチェックリストの項目が重複していることから、基本チェックリストの結果を活用し、足腰しっかり教室に参加を促したりしております。

また、やせ過ぎの方には栄養改善のパンフレットを配布しております。令和4年から、富山県後期高齢者医療広域連合からの委託を受け、高齢者医療、国民健康保険、健康づくり、介護予防を一体的に取り組んでおりますので、議員のご理解を賜りますようお願い申し上げます。答弁といたします。

○議長（前原英石君） 村長 渡辺 光君。

○村長（渡辺 光君） 4番田村議員の高齢者移動支援についてのご質問にお答えをさせていただきます。

ご指摘のとおり、運転免許証を返納された方及び高齢者の移動手段の確保につきましては、現在において、そして今後さらに高齢化が進む中で大きな課題であるという認識でございます。

私の公約に掲げました自動運転バスの導入の是非については、今ほどの課題解決の手法の一つになり得ると捉えており、同時に、医療を受けやすい環境の整備につながるものと認識しております。

しかしながら、ご指摘のとおり、当村においては、歯科医院はあるものの、その他医療施設は不在の状況であり、今ほど申し上げました医療を受けやすい環境の整備においては、村外の医療機関まで運行させる必要があるものと考えております。

よって、自動運転のバスの導入の是非を検討する際には、医療を受けやすい環境整備のためにも、近隣の医療機関及び所在する自治体の理解も得ながら、大まかな運行ルートも同時に想定し、検討すべきものであると考えております。

あくまで自動運転バスの導入については、令和7年度中の是非の判断を想定し、さらなる情報収集や視察を進めてまいります。自動運転バス導入が否となった際の本課題の解決や、医療を受けやすい環境整備には対案が必要不可欠であるものであります。今後の対案についても、同時に検討を進めてまいりたいと考えております。

以上、ご理解のほどお願い申し上げます。答弁とさせていただきます。

○議長（前原英石君） 田村 馨君。

○4番（田村 馨君） 答弁、ありがとうございました。

再質問は幾つかあるんですが、まず最初はフレイルの件に関して1つだけちょっと確認させていただきます。

今、このフレイル予防の件に関してなんですけど、例えば高齢者のコミュニティー、あるいは憩いの場づくりというものも必要になってくると思いますが、一方でほかの自

治体の事例なんかを見ていると、参加される方の固定化、あるいは閉じ籠もってなかなか参加されないと。そういった方々もいるような状況なんですけど、そういった方々への参加促進というのをどう図っていくのか、またちょっとお聞きしたいと思います。

それと、高齢者の移動支援についてちょっと再質問をさせていただきます。

先だって渡辺村長は、東京のほうで、若手町村長の支援活動をされている「ささ（えよう）つな（がろう）自治体協議会」の方と会われて、今ほど話にあったような自動運転バスの現状あるいは未来について伺われたとSNSのほうに投稿されておられましたが、そこでどのような、具体的な情報とかアドバイスがあったのか、まず一つお伺いします。

この問題に関してなんですが、私もこれまで何度か議会で取り上げてまいりました。例えばデマンド交通やコンビニクルのシステムなどをこの一般質問などで当局に提案してきた記憶もあります。自動運転バスの導入も含めてなんですが、少しでもこの件について前進することを私としては願っております。

先ほども言いましたが、特に要望の多い医療機関への通院の問題を解決するためにはどうすればいいのか。やはり近隣自治体への越境ができる公共交通、これを実現することではないかと私は思っています。

例えば立山町と上市町を含めた中新川広域一帯での公共交通の構築、舟橋村と上市町、そして立山町との共同出資で第三セクターを立ち上げる。そして、そこを軸にして公共交通網を構築していくべきではないかと私としては考えていますが、この件に関して当局の見解をお伺いします。

○議長（前原英石君） 生活環境課長 田中 勝君。

○生活環境課長（田中 勝君） 田村議員さんの再質問にお答えいたします。

5月8日にコロナの感染症の分類が2類から5類に移行され、今まで自粛していた活動も本格化するものと考えております。

フレイル関係につきましては、社会福祉協議会さんとともに、今まで以上に参加しやすい環境づくりについて、お互いに意見を出し合いながら進めてまいりたいと思っておりますので、またよろしく願いいたします。

以上であります。

○議長（前原英石君） 村長 渡辺 光君。

○村長（渡辺 光君） 今ほどの自動運転バスの件につきましての再質問、お答えをさせ

ていただきます。

先般、東京のほうで、ささつな自治体協議会という協議会のお力添えをいただきまして、自動運転バスの導入を推進しておる企業様と面談をさせていただきまして、情報交換をいたしました。

現在、既に先行して実証実験を行っておる地域の実例を基に、2年間ほど行った結果を用いて、どういったものが今後必要なのかという助言をいただきました。

具体的に申し上げますと、自動運転バス、無人で運行するバスではあるんですけども、導入して2年間たった今、利用者の安心感を得るためには、やはり人を1名ほど乗せておいたほうが良いというようなお声がありました。その先行しておる地域においては、シルバー人材センターの方をお一人、そのバスの中に乗っていただいて、乗られる小さなお子様であったり、高齢の方の介添えであったり、走られる運行ルートのご案内を行っておったりと、そういったことをして安心感の提供をしておるというふうにおっしゃっておられました。あわせて、予算的な部分においても、その場においてお示しいただいています。

現在、国内においては、実証実験が比較的進んでいる地域が4地区あるというふうなご説明であり、ただ、その4地区は、全て基礎自治体単独で国の予算をいただいて実証実験を行っておるという状況でございました。

あわせて、医療を受けやすい環境整備という点において、ご指摘のとおり、当村においては医療施設が不足しておる状態で、村外の医療機関へ運行ルートを設けなくてはならないという点において、近隣の自治体、相手様もあるお話ですので、個別、固有名詞のほうは避けさせていただくんですけども、近隣の自治体のご理解は必要不可欠になってくると思います。

その上で、どういった形で進めていくべきなのか。ご理解いただく自治体も、こういった公共交通の手法が必要であれば、共に足並みをそろえて導入を検討していく必要があるかというふうに思いますし、あくまでも当村の都合でそういった医療機関へ運行ルートを設けたいということであれば、理解をいただくというその点になってしまうのかなというふうに思います。

ただし、こういった公共交通の整備においては、どの自治体においても課題の一つであるというふうに考えておりますので、近隣の自治体の首長様及びそういった議会の皆様にもご説明をさせていただきまして、もし共に実証実験のほうを導入したいという声

が上がれば、足並みをそろえて進めてまいりたいというふうな思いでございます。

以上、答弁とさせていただきます。

○議長（前原英石君） 田村 馨君。

○4番（田村 馨君） 再質問への答弁、ありがとうございます。

この公共交通の件に関してなんですが、私も今、一例として中新川の広域一帯でできないかということ、ちょっとお話しさせていただきましたけども、やはり運行する車両を全て自動運転にするのではなく、例えば従来のマイクロバス、よくあるのがトヨタのハイエースをベースにしたバスなんですが、まずそういう車両を導入しつつ、その中に自動運転のバスも何台か導入して実証実験していく必要があるのではないかと思います。

ただ、先進地、それぞれあるんですが、富山、とりわけこの北陸の冬に降る雪というのは水分が非常に大きくて重い雪でありまして、場所によっては、積雪地であっても、何といいますか、結構さらさらの雪で、あんまり交通の支障が出ないようなところもあるんですが、富山の場合は一たび豪雪となりますと、なかなか通常の車でも通行が困難になるような、そういった状況になります。

そこで、例えば自動運転バスとなると、実際、運行の問題が出てこないのかというのがまず一つあります。あと、乗務員1名乗せるという形で、その乗員をシルバー人材の方をお願いするという事なんですが、営業用車両となると、これ、2種免許、もしくは大型の2種免許とかが必要になるのではないかと思います、その辺ちょっと確認です。答弁をお願いします。

○議長（前原英石君） 村長 渡辺 光君。

○村長（渡辺 光君） 今ほどの再質問、お答えをさせていただきます。

2種免許の必要性に関しましては、現在実証実験を行っておる地域は、いわゆる営業ナンバーではなくて通常のナンバーで運行しておると。すなわち、費用のほうはかからないような運用で行っておるということで、2種免許のほうは特段必要がないというふうに伺っております。

あくまでも乗員するだけでありまして、運転をするわけではないという点でございますので、そういった対応で今は問題なく運行しておるというふうに伺っております。

あと、この自動運転バス単独での実証実験の以前、同時でもいいんですけども、そういったマイクロバスで併せての実証実験というお話ではあるんですが、利用者数を測

定する意味においては、いきなりこの自動運転バスを導入してみようという形ではなく、前段階としてそういった試験的な運用を見て利用者の推移を計るというのも非常に大事なことではないかなというふうに思っておりますので、今後、是非のほうがどうなるかにもよってはああるんですけども、そういったものを対案の一つとして検討を進めてまいりたいというふうに思っておりますので、ご理解を賜りますことをお願い申し上げます、答弁とさせていただきます。